The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アジア太平洋論叢 第10号　序
Author(s)	赤木, 攻
Citation	アジア太平洋論叢. 2000, 10, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99942
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

序

アジア太平洋研究会の機関雑誌『アジア太平洋論叢』の第10号を刊行することができ、望外の喜びに浸っている。

創刊号は、『アジア学論叢』との名称で1991年に出された。その号で、アジアを対象とする地域研究の重要性を指摘するとともに、＜ことば＞を十二分に生かした「アジア学」の確立を、私は提唱している。また、大きな転機となったのは第６号で、名称を『アジア太平洋論叢』に変更したが、冷戦構造の崩壊とアジア経済の急成長を背景として、アジア太平洋という枠組みを研究視角として共有することの重要性を意識したからに他ならない。

『アジア学論叢』から『アジア太平洋論叢』への変更に、90年代の変化の流れが反映していることを感じるのは、私だけではあるまい。アジアを歩いて感じるのは、相互関係の緊密化である。近代が生んだ国境を無視した様々なレベルでの相互関係が発達し、それが人々の生活や意識を規定し始めたといえよう。先年中国の雲南省を訪れた際驚いたのは、市場に溢れる商品の国籍の豊かさと書籍はほとんど皆無なのにコンピュータが１台置いてある大学の教官研究室であった。ヒト・モノ・情報が大量に自由に地球上を行き交うようになったのが、90年代の最大の特徴であろう。もちろん、原子力エネルギー・インターネット・遺伝子といったキーワードも忘れてはならない。

その90年代に育った『アジア太平洋論叢』である。しかもひとつの区切りである第10号が20世紀最後の年に刊行されることであり、20世紀のアジアを特徴付けるような何らかの具体的な特集で飾ろうとの計画もなかったわけではない。それがうまくいかなかった最大の理由は、「新大学革命」という私たちの周辺の事情からくる多忙である。とりわけ、今年度は国立大学には「独立法人化」というきわめて非教育的な網が投げかけられる可能性が高くなったため、その対応に大学人は大量のエネルギーを割かざるを得なくなったという背景などがある。

とはいえ、20世紀のアジアの各地の動態を抉る好論文が多数集まり、特集「20世紀アジアにおける民衆と政治」と題する特集を組めたのは、うれしい限りである。大方のご批判を賜れば幸いである。

なお、本号を、この３月末に大阪外国語大学を退官される地域文化学科アジア・アフリカ講座の桑島昭先生と岡崎正孝先生に捧げる。両先生のアジア太平洋研究会への貢献は多大であり、ここに感謝申し上げるとともに、今後のご多幸とさらなるご活躍を祈念する次第である。

2000年（平成12）年３月

赤木　攻

（アジア太平洋研究会・会長）